

0. 小学校英語活動が必修化されようとし、それに伴い中学校以降の英語教育も変わろうとしつつあるが、この時点でこの根本問題を小中高大の教育を通して検討してみることが言語政策上意義が深い。同時に我々教員の側にとっても、各自が抱く目的観が長期的、短期的を問わず指導そのものに微妙に影響を与えていると考えられるので、時折振り返ってみることが大切であると思った。抽象的ではあるけれどもこれまで考えてきたことを中心に述べるつもりである。ただし項目すべてが達成が容易であるとは思っていない。

(教養)

1. 思想や思考の振り幅の拡大（特に日本語との比較を通して）(Cf. 小田実：1989)
2. 偏狭性からの解放と異文化に対する寛容な態度（日本語や日本文化のもつ無意識の束縛の面から及び家庭の文化からの解放）(Cf. Hawkins:1981)
3. 多文化交流・国際連帯を通しての多文化共生（アジアとの和解など）
4. 個の確立と自立した行動への手段（バランスの取れた価値観の比較検討による）
5. 人生を豊かにしてくれる趣味の拡充（文学、音楽、ラジオ、文通など）
6. 知的根気と緻密さ、論理性の練磨(Critical thinking)
7. 日本語や古典や伝統に対する新たな興味・関心と回帰

---

(実用)

8. 科学技術の発達や経済、政治の交流発展の手段
9. 職業選択の幅の拡充
10. 第2外国語習得へのヒント
11. 受験の効用（日本語での学び損ねた分の補強）